

第16部会

こで、先端医療技術（生命操作）、例えば脳死判定や脳死臓器移植の問題に対して、各々の文化における死生観に関する本質的な議論である自らの生と死をどのように捉えるのかについて検討する。周知のように、我が国で二〇〇九年七月十三日に「脳死は人の死」という臓器移植法案が可決された。この法律によつてドナー（臓器提供者）の生きる権利やいのちの尊厳が奪われ、脳死を人の死としない考え方を抹殺する方向へと突き進んでいった。「脳死は人の死」であるとは科学的に立証できていないこと、厳密な脳死判定後にも長期脳死の実例があることなどそれらの最も重要な事実が無視され、脳死臓器移植に急ぐ改悪案が成立したのだった。ドナーとレシピエント（臓器受容者）の「生きる権利」の狭間の中で、いのちが隠蔽されている。生と死の教育・いのち教育の現場で教材として活用されている『隠された風景―死の現場を歩く』（福岡賢正）を手がかりに、「いのちとは何か？」を考えたい。著者は、人間の勝手な都合で不要となったペット（犬、猫）を処分している現場（動物管理センター）と肉をつくるために家畜を処理している屠殺場など社会から隔離された「死の現場」でのルポ（取材）を通じて、生きることの本当の意味を世に伝える。「現代という時代は『死』が隠蔽され、いのちがとも見えにくくなっている時代です。それは生きていくという実感が乏しいということでもあります。だからこそこの社会は今、事実をきちんと伝えて、まっとうなことを主張してくれることを待っています」（二二〇頁）「人が生きるために他者の生き物のいのちをもらうことは『殺す』ことではありません。自分の中で『生かす』こ

とです」（二二七頁）。「死の現場」である動物管理センターや屠殺場、（脳死）移植医療の現場に共通してみられるのは、「いのち」の隠蔽である。現代社会は犠牲となった動物たち（現場に関わる人々）とドナーたち（その家族たち）の心の痛み（悲しみ・苦しみ）が徹底して見えてこない社会を生み出した。バイオエシックス教育の課題は、あるべき技術に対しての「是非を問う」のでも、「価値中立」に向かうよう仕向けることではない。失われてしまった（奪われようとしている）いのちとは何かを想像する力を、各自身に問いかけることが必要である。「生と死の教育」とは、あらゆる者が当事者であるという立場に立ち、「いかに生きるか、いかに死んでいくのか」を問い続けるプロセスの中で、互いにいのちの価値や人生の価値を見つめ直す共同作業である。

中有縁起と現代的いのち

金 永 晃

仏教において生命論は、十二支縁起（業感縁起）による輪廻の前世として時間的流れを説明する。特に四有思想は、一切の生死を相續するところに四有過程を辿るという。

四有とは、「生有・本有・中有・死有」として生死循環の一期を四つに分けて説明する。本有は出生から死まで一生を意味し、死有は業力によつて生まれた身体が無常のため寿命が尽き

るのであるが、その死まで刹那の生を意味する。中有は死後次の生を受ける以前の中間生を意味し、生有は中有の生が父母の縁によって胎内に託胎する刹那の生をいう。中有思想は、死後から来世に生まれるまでの中間生の実相を明かす思想として初期の輪廻説から大乘の唯識学の輪廻説として発展する媒介の役割をした。

四有説とは、生の転換原理を基準として説明する時、死有と生有は刹那として、中有と本有は相続として分類することができ。四有思想の中で中有思想は、死後から来世に生まれるまで中間生命体の実相を明らかにする思想として輪廻思想においては無視できない重要な思想である。

仏教において生命は、一連の連続の流れとして認識する。その点において、一般的に衆生は生と死を繰り返すとして認識し、輪廻の流れとして生死（還生）を繰り返す。

仏教における生有縁起は、「個別的生の縁起の始まり」の現象である。生の中間原理である中有は唯識学の阿頼耶識の生命観に影響を与える。唯識学では、中有の概念を識の転換として阿頼耶識を立てる。一切衆生は、死後前世の業が阿頼耶識に貯蔵されて次の生命に絶え間なく続く。

仏教的通念においては生か結成される条件（三事相合）として、「両親の相合・それから中有の下降・母親の適切は条件」を立てる。ここで中有は前世と後生の媒介となる。この中有の概念に包括されて阿頼耶識として転換される。『瑜伽師地論』には、父母が相合して、そこに一切種子である阿頼耶識の作用として受胎が成し遂げられる。

- 1 阿頼耶識は人間として生まれるため最初に生氣を与える。
- 2 阿頼耶識は母胎で生まれる時、静止状態であるのではなく、受胎するとすぐ活動を始める。
- 3 この時、父母は縁になり、阿頼耶識は因となって因と縁が相合して胎児という果報が生じる。

- 4 誕生から始まる胎児は業力によって成長する。父母の精血である胎に阿頼耶識が結合して最初の生であるカララ（羯羅藍）となる。託胎の瞬間中有はなくなり、刹那に生有を過ぎ本有が始まる。この時、阿頼耶識は能変識を通して変化して精神界の阿頼耶識・末那識・六識として変化されて行く。こうして最初の阿頼耶識が変化を通して精神と肉体を形成して行く。

- 5 唯識説では、阿頼耶識は常識的な意味での記憶（生後の経験）だけではなく、過去のすべて経験を貯えている「蔵識」とされている。唯識説における阿頼耶識とは、脳を含めた「前身」と考えられる。仏教における生とは自身の業によって存在する。この業の力によって三事相合として生が始まる。中有は精血の凝結体の中に下降して生が始まる阿頼耶識の別の姿である。中有とは過去の個別の生が作る業として生有縁起を通して自身の業が複製される。一方、現代生命科学において、各個人の遺伝子の構成は生涯普遍のものであり、各細胞構成物質の恒常不変を保つべき働きをする。阿頼耶識と現代生命科学において遺伝子とは、生命の循環原理という点で類似点がある。